



## 組織力が生んだ救出

2011年3月11日

震災遺構である宮城県仙台市立荒浜小学校を見学しました。荒浜小学校は、海岸から約700メートル離れた小学校で、震災当時、91名の児童が通っていました。荒浜地区には、800世帯の2,200人が暮らしていました。荒浜地区には高くて頑丈な建物は小学校しかなく、児童・教職員・地域の方320名が小学校に避難し全員が無事救助されました。震災後「災害危険区域」として指定され、住宅の新築ができない地区となっています。

大切な命を守る。9月は防災月間！

外観を見た自分の初めの感想は、これまで自分が勤めた小学校の様子と全く変わらない、今にも子供たちの声が聞こえそうな学校だということです。しかし、学校に足を踏み入ると、1階の低学年の教室や保健室には、天井まで浸水した跡があり、床には、がれきで引きずられた跡が残っていました。3台の自動車が津波により廊下に流されてきたそうです。倒壊したコンクリートの壁、ベランダの曲がりくねった鉄柵から、津波の力の大きさを実感しました。地震による津波で、突然に日常が失われたことが分かりました。地域の方は、そのことを「ほんの一瞬で、思い出がすべて流された」と表現しています。

自分が大切だと感じたことの一つは、「的確な判断と組織力」の大切さです。地震当日、荒浜小には新しい立派な体育館があったため、地域の方はその体育館に避難するのかなと思ったそうです。しかし、校長先生は4階の教室に避難するよう指示し、教頭先生はすぐに地区ごとに4階の教室を割り振り、地域の代表者は、地域ごとに安否確認をしたと話していました。それから間もなく、地震から70分後、未曾有の大津波に襲われ、校舎2階まで水に浸かりました。3時間後、初めのヘリコプターが救助に来ました。児童がパニックにならないよう、最初のヘリコプターで教員2人を先に救助先に行かせ、残りの教員は、いつヘリコプターが来てもいいように、児童を小さい子から順に4階から屋上の階段に並ばせ看護したそうです。最後の児童が救出されたのは、翌朝5時。地域の方を含めた最後のひとは、地震から27時間後に救助されました。的確な判断と教職員と地域の方が協力した組織力が生んだ救出だったと思います。

もう一つは、「日頃からの危機管理」の大切さです。避難訓練について、校長先生はこんなことを話しています。

「避難訓練の方法など、伝わってきたものをさらに工夫する。良かれと思うことはその時にやっておく。その積み重ねが何かの時に少しでも災害を少なくしていくのかなと思う。」

いつもやっている避難訓練を一回ごとに見直し、さらに、工夫していく積み重ねが、大切な命を守ることに繋がっているのだと深く感じました。

そして、最後に、「地域にとっての学校の役割」の大切さです。荒浜地域の方々が「学校は母のような存在」「学校は灯台のような存在」と述べています。学校は児童生徒と教職員が生活するだけの場所ではないこと、地域にとって大きな役割を果たしていることを改めて強く感じました。自分の学校が母のように温かく優しい存在になっているか、自分の学校が灯台のように地域の灯りをともしているか、再確認することが必要だと感じました。



9月は防災月間です。避難訓練を実施する学校も多くあると思います。「危機管理マニュアル」は、学校保健安全法に基づき、教職員が円滑かつ的確な対応を図るため、全ての学校において作成が義務付けられています。「学校の危機管理マニュアル作成の手引」（文部科学省）を参考に、是非、各学校に合った見直しや工夫をお願いします。地震・津波災害については、[「学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き」](#)も参考となります。いざという時、子供たちの命を守るために、改めて見直しをお願いします。（この夏3.11伝承ロードの一つを見学した藤枝祥子管理主事より）